

創造力と共創力を兼ね備えたリーダーの誕生へ

技術は、静かに進む。それは、川の流れのように、人々の営みの背後で姿を変えながら、いつの時代も未来へと続いてきた。だが、技術そのものが未来を動かすわけではない。未来を動かすのは、技術を扱う“人間”である。

急所を見抜き、構造を読み、語りを整え、人と人をつなぎ、価値を統合する者。その者こそが、次の時代の扉を開く。

本書は、静かに未来をつくる技術者たちの物語である。

目次

序文 技術者に共創力が求められる時代の到来	2
第1章 技術の急所を捉える力	3
第2章 構造を読み解く力	5
第3章 語りで組織を動かす力	7
第4章 共創力としてのリーダーシップ	10
第5章 次世代開発者に求められる統合力	12
結論 創造力と共創力を兼ね備えたリーダーの誕生へ	14
あとがき	15

著者 落合 以臣
発行者 株式会社ジョンクエルコンサルティング
代表者 落合 以臣
発行日 2026 年 1 月 8 日

序文 技術者に共創力が求められる時代の到来

技術というものは、いつの時代も静かに進んできた。それは、川の流れのように、あるいは風のように、人々の営みの背後で、黙々とその姿を変えていく。火を扱う技術、鉄を鍛える技術、船を造る技術、そして現代の電子や材料の技術。それらは人間の営みを支え、未来を形づくってきた。

しかし、未来を動かしてきたのは、技術そのものではない。技術を扱い、意味を与え、価値へとつなげてきた“人間”である。だが、時代が大きく揺れ動くとき、その静かな流れは、突如として人間の前に姿を現し、「おまえはどう生きるのか」と問いかけてくる。

本書は、技術者が未来をつくるために必要な五つの力を描いた物語である。

- 技術の急所を捉える力
- 構造を読み解く力
- 語りで組織を動かす力
- 共創力としてのリーダーシップ
- それらを統合する力

これらは、個別の能力ではない。統合されたときに初めて、技術者は未来を動かすための静かな武器になる。未来は、いつも静かに始まる。だが、動かすのは人間だ。

本書は、冬の研究所を舞台に、技術者たちが直面する“静かな変化”を描く。そこから物語は静かに始まる。

第1章 技術の急所を捉える力

技術というものは、しばしば人間の思惑を超えて進む。それは、古代の河川が人々の生活を形づくったように、あるいは、山脈が国境を決めたように、人間の営みの背後で、静かに、しかし確実に流れを変えていく。だが、その流れを“急所”として捉える者は、いつの時代も少ない。

技術の急所とは、技術そのものの核心であると同時に、未来の価値が芽生える一点でもある。

この章では、その“急所”をめぐる物語を描く。

1. 冬の研究所にて

冬の朝は、研究所に独特の静けさをもたらす。建物の外壁は冷気を吸い込み、廊下には、まだ誰も歩いていないような澄んだ空気が漂っていた。佐伯は、その静けさの中を歩いていた。手には、前日の会議で配られた資料が挟まれている。分厚い紙束は、技術者たちの努力の結晶であったが、彼の胸には、どうしても拭えない違和感があった。

「技術は進んでいる。だが、未来へ向かっているようには見えない。」

その思いが、彼の歩みを重くしていた。

研究室の扉を開けると、若手の宮本が、すでに机に向かっていた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

佐伯は、資料を机に置き、しばらく無言でページをめくった。そこには、膨大なデータ、精緻なグラフ、そして専門用語が整然と並んでいた。だが、そのどれもが、技術の未来を語ってはいなかった。

2. 技術の迷いは、データの中には現れない

「宮本、この技術は……どこへ向かうんだろうな。」

佐伯の問いに、宮本は顔を上げた。

「どこへ、ですか？」

「そうだ。確かに技術は進んでいる。だが、未来へ向かっているようには見えない。」

宮本は、資料を見つめながら言った。

「性能は出ていますし、データも十分に揃っています。それでも、未来へ向かっていない……どういことでしょう。」

佐伯は、窓の外に目を向けた。冬の空は薄い灰色で、遠くのビル群が霞んで見える。

「技術は、技術だけでは未来につながらない。それが、最近よくわかるんだ。」
宮本は、静かに頷いた。若さゆえの素直さが、その表情にあった。

3. Death of Valley —— 技術者が最も苦しむ場所

その日の午後、佐伯はホワイトボードの前に立ち、一本の曲線を描いた。上昇し、急落し、再び上昇する曲線。

「宮本、これが何かわかるか？」

「……Death of Valley ですね。」

「そうだ。技術の潜伏期間だ。」

佐伯は、曲線の谷の部分で指でなぞった。

「技術の急所を捉えられる者は、この谷の“向こう側”を見ている。データではなく、構造を見ている。性能ではなく、未来を見ている。」

宮本は、曲線を見つめながら言った。

「……谷の向こう側を見る。それが、急所を捉えるということなんですね。」

「そうだ急所は今にはない。未来にある。」

4. 製品イメージは、未来への“仮説”である

佐伯は、机の上から一枚の紙を取り出した。そこには、未来の製品のラフスケッチが描かれていた。

「これ……佐伯さんが描いたんですか？」

「そうだ。技術を語る前に、未来を描くんだ。」

宮本は、スケッチをじっと見つめた。

「でも、これって……まだ市場も読めないし、技術的にも……」

「だから描くんだよ。」

佐伯は、静かに言った。

「製品イメージは、未来への“仮説”だ。仮説があるから、技術の急所が見える。急所が見えるから、研究の方向が定まる。」

宮本は、スケッチを見つめながら呟いた。

「…未来って、描けるんですね。」

「描けるさ。描けなければ、技術は迷子になる。」

5. 技術の急所とは、“未来の一点”である

佐伯は、窓の外の灰色の空を見つめた。

「宮本、技術の急所を捉えるというのはね……未来を先に見ることなんだよ。」

「未来を…先に？」

「そうだ。未来の市場、未来の顧客、未来の価値。それらを先に描き、その未来から逆算して技術を見る。」

宮本は息を呑んだ。

「だから、急所は“今”にはないんですね。」

「そうだ。急所は“未来”にある。未来を見て初めて、今の技術の価値が見える。」

佐伯は、静かに言った。

「技術者は、未来の翻訳者なんだよ。」

技術の急所を見抜いたとき、技術者は次に“構造”という地図を必要とする。

第2章 構造を読み解く力

技術というものは、単独では存在しない。それは、古代の城が地形の上に築かれたように、必ず何かの“構造”の上に成り立っている。市場の構造、事業の構造、組織の構造。これら三つの構造を読み解くことは、技術者にとって、未来を見通すための地図を手にするに等しい。

この章では、その“地図”をめぐる物語を描く。

1. 市場構造は、静かに変化する潮流である

冬の午後、研究所の窓から見える街は、薄い陽光に照らされていた。人々の動きはゆっくりで、まるで季節の移ろい確かめるように歩いている。

佐伯は、その光景を眺めながら言った。

「宮本、市場というのは、表面だけを見てはわからない。」

宮本は、資料を手にながら首をかしげた。

「市場って、顧客がいて、競合がいて……そういうものではないんですか？」

「それは“表面”だ。」

佐伯は、ホワイトボードに大きな円を描いた。その中に、ゆっくりと波のような線を引く。

「市場は、潮流なんだよ。表面は静かでも、深層では大きな流れが動いている。」

宮本は、その線を見つめた。

「顧客が何を求めているかではなく、顧客がまだ気づいていない価値を読む。それが市場構造を読むということだ。」

佐伯の声は、静かだった。だが、その静けさの奥に、長年の経験が滲んでいた。

2. 事業構造は、価値が流れる川である

佐伯は、次に一本の長い線を描いた。上流から下流へと続く線。

「宮本、これが事業構造だ。」

「川…ですか？」

「そうだ。価値が流れる川だ。技術は上流にある。だが、価値が生まれるのは下流だ。」

宮本は、線の途中に描かれた丸を見つめた。

「ここが、価値が変換されるポイントだ。技術 → 機能 → 製品 → 事業 → 市場 → 顧客価値」

「…こんなに段階があるんですね。」

「そうだ。技術者が技術だけを見ていると、この“価値の流れ”を見落とす。」

佐伯は、静かに言った。

「技術者は、上流にいるからこそ、下流の景色を知らなければならない。」

宮本は深く頷いた。

3. 組織構造は、見えない地形である

その日の夕方、佐伯と宮本は、別の会議室に移動した。壁には、組織図が貼られていた。だが、佐伯はそれを一瞥しただけで、ホワイトボードに複雑な線を描き始めた。山のような形、谷のような形、そして断層のような線。

「これが組織構造だ。」

宮本は思わず笑った。

「なんだか…地図みたいですね。」

「その通りだ。組織は“地形”なんだよ。山もあれば谷もある。

そして、断層もある。」

佐伯は、断層の線を指でなぞった。

「若手とベテラン、技術と事業、現場と経営。この断層が、技術の価値を伝わりにくくしている。」

宮本は、静かに頷いた。

「…確かに、会議で噛み合わない理由がわかる気がします。」

「語りの地形が違うからだ。」

佐伯の声は、淡々としていた。だが、その淡々とした語りの中に、組織というものの厄介さが滲んでいた。

4. PRCM は、構造を可視化する地図である

佐伯は、机の上から一枚の紙を取り出した。そこには、PRCM のフレームワークが描かれていた。

「宮本、これが構造を読むための“地図”だ。」

「PRCM…」

「そうだ。

急所 (P)

構造 (R)

語り (C)

実装 (M)

この順番で見ると、技術の価値が立ち上がる。」

宮本は、紙をじっと見つめた。

「…構造を読むって、こういうことなんですね。」

「そうだ。構造を読める技術者は、未来を読める。」

佐伯は、静かに言った。

5. 技術者が構造を理解した瞬間、世界が変わる

その日の帰り道、宮本は研究所の外に出て、冬の空気を胸いっぱい吸い込んだ。街の灯りが、遠くまで続いている。その灯りは、まるで価値の流れのように見えた。

「技術って…こんなに広い世界とつながっていたんだ。」

宮本は、静かに呟いた。技術は、技術だけではない。市場とも、事業とも、組織ともつながっている。構造を理解した瞬間、技術者の世界は一気に広がる。佐伯が言った言葉が、宮本の胸に深く残っていた。

「未来を読むには、構造を読め。」

宮本は、夜空を見上げた。その空は、どこまでも静かで、どこまでも広がった。

構造が読めても、未来はまだ動かない。未来を動かすのは“語り”である。

第3章 語りで組織を動かす力

技術というものは、しばしば言葉を必要としない。実験装置は沈黙のまま真実を語り、データは淡々と結果を示す。技術者は、その沈黙の世界に長く身を置くほど、言葉を使わずとも理解し合えるような錯覚に陥る。しかし、組織というものは、沈黙では動かない。人間の営みは、言葉によって形づくられ、言葉によって未来へと進む。

この章では、技術者が最も苦手とし、しかし最も必要とされる「語り」の物語を描く。

1. 冬の夕暮れ、会議室にて

冬の夕暮れは、研究所の窓を淡い橙色に染める。その光は、どこか寂しげでありながら、人間の営みを静かに照らす温かさを持っていた。佐伯と宮本は、会議室の中央に置かれた長いテーブルを挟んで座っていた。テーブルの上には、技術資料が整然と並んでいる。

「宮本、語りというものは、技術者にとって最も難しいものだ。」

佐伯は、資料を一枚めくりながら言った。

「技術は、データで語れる。だが、未来はデータでは語れない。」

宮本は、静かに頷いた。

「…確かに、会議で技術の説明はできても、未来の話になると急に言葉が出なくなります。」

「それが語りの断層だ。」

佐伯は、ホワイトボードに三本の線を描いた。それぞれが微妙にずれ、交わらない。

「若手とベテラン、技術と事業、現場と経営。同じ組織にしながら、違う言語を話している。」

宮本は、その線を見つめながら言った。

「…確かに、噛み合わない理由がわかる気がします。」

2. 語りの断層は、組織の“見えない壁”である

語りの断層は、目に見えない。しかし、その影響は大きい。技術者が語る「性能」は、事業部にとっては「価値」ではない。経営層が語る「市場」は、現場にとっては「遠い未来」に過ぎない。若手が語る「可能性」は、ベテランにとっては「危うさ」に映る。このように、語りの断層は、組織の中に静かに横たわり、技術の価値を伝わりにくくしている。

佐伯は、静かに言った。

「語りが揃わなければ、未来は動かない。」

宮本は、その言葉を胸に刻んだ。

3. 発想の転換は、語りの“器”をつくる技法である

その日の午後、佐伯は宮本を研究室の奥にある小さな部屋へ案内した。そこには、色とりどりの付箋、短い言葉、スケッチ、図形が散りばめられたノートが置かれていた。

「宮本、これが発想の転換のノートだ。」

宮本は、ページをめくりながら言った。

「…まるで絵巻物のようですね。」

「発想の転換は、素材 → 系統線 → インデックス → 連想素材という流れで、語りの“器”をつくる技法だ。」

佐伯は、ノートの一ページを開いた。そこには、ある技術テーマに関連する素材が、まるで木の枝のように広がっていた。

「素材を集め、系統線でつなぎ、そこからインデックスを生み出す。これが語りの“核”になる。」

宮本は、静かに頷いた。

「…語りって、技術者にとって武器なんですね。」

「そうだ。語りは、未来を動かす武器なんだ。」

4. 可視化は、語りに命を吹き込む

佐伯は、机の上に色鉛筆を並べた。

「宮本、語りは“色”で変わる。」

「色……ですか？」

「そうだ。モノクロの図は、情報を伝える。カラーの図は、未来を伝える。」

佐伯は、未来の製品イメージを色鉛筆で描き始めた。青、緑、赤、黄色——色が加わるたびに、図は生き物のように息づき始めた。宮本は、その図を見つめながら言った。

「…これなら、誰でも未来をイメージできますね。」

「そうだ。語りは、未来を“見える形”にする技術なんだ。」

5. 語りが揃ったとき、組織は動き出す

数日後、研究所と事業部の合同ミーティングが開かれた。宮本は、未来の製品イメージを描いた図を机の中央に置いた。色鮮やかなその図は、会議室の空気を一瞬で変えた。

「…これが、我々が目指す未来です。」

事業部のメンバーが、図を覗き込む。

「なるほど…こういう世界をつくりたいのか。」

「この技術は、ここにつながるのか。」

「だったら、我々の部門はこう動ける。」

語りが揃った瞬間、会議室の空気が変わった。未来が共有され、判断が揃い、組織が動き始めた。

佐伯は静かに言った。

「宮本、これが語りの力だ。」

宮本は深く頷いた。

語りが揃ったとき、組織は動き始める。だが、未来は組織の外にも広がっている。

第4章 共創力としてのリーダーシップ

技術というものは、本来、ひとりの人間の手の中で完結するものではない。それは、古代の大河が多くの支流を集めて大きくなったように、多くの人間の知恵と経験が交わることで、初めて価値を生む。

しかし、技術者はしばしば孤独である。実験室の静けさに身を置き、データと向き合い、自らの思索の中に沈み込む。その孤独は尊い。だが、未来をつくるには、それだけでは足りない。未来は、人と人が交わる場所で生まれる。

この章では、技術者が未来を動かすために必要な「共創力」という新しい力を描く。

1. 冬の朝、外部パートナーとの会議

冬の朝、研究所のロビーには、外部パートナー企業の担当者たちが集まっていた。技術者、マーケター、営業、経営企画。立場も文化も違う人々が、ひとつのテーブルを囲もうとしていた。佐伯は、その光景を静かに見つめていた。

「宮本、今日は“共創”を体験する日だ。」

宮本は緊張していた。だが、その緊張の奥には、どこか期待のようなものもあった。

「共創…協力とは違うんですね。」

「そうだ。協力は、役割を分担すること。共創は、価値を共につくることだ。」

佐伯の声は、静かだった。しかし、その静けさの奥には、長年の経験が滲んでいた。

2. 会議室に流れる“空気”

会議室に入ると、すでに複数の企業の担当者が席に着いていた。資料が配られ、名刺が交換され、形式的な挨拶が交わされる。だが、その空気はどこか硬かった。

「我々はスピードを重視したい。」

「いや、品質が最優先だ。」

「市場の要求はもっと先にある。」

「技術的には難しい。」

言葉は交わされているが、心は交わっていなかった。宮本は、その空気を肌で感じていた。

「…これが、組織と組織がぶつかる場なんですね。」

佐伯は静かに頷いた。

「そうだ。共創の場は、最初は必ずこうなる。」

3. 未来を“揃える”ということ

議論が噛み合わないまま、時間だけが過ぎていった。そのとき、佐伯が静かに口を開いた。

「皆さん、未来を一度“揃え”ませんか。」

会議室が静まり返った。佐伯は、未来の製品イメージを描いた図をホワイトボードに貼った。色鮮やかなその図は、会議室の空気を一瞬で変えた。

「これが、我々が共につくる未来です。」

沈黙が流れた。そして——ひとり、またひとりと、図に近づいていった。

「……この未来なら、我々も参加したい。」

「この部分は、うちの技術が使える。」

「市場の要求とも一致している。」

「だったら、我々の役割はこうだ。」

空気が変わった。未来が共有され、語りが揃い、価値がつながった。宮本は、その光景を見つめながら思った。

「…未来って、こうやって動き出すんだ。」

4. 共創の場をつくる技術

会議が終わった後、宮本は佐伯に言った。

「佐伯さん…共創って、こんなに空気が変わるんですね。」

「そうだよ。共創の場には、いくつかの条件がある。」

佐伯は指を折りながら言った。

「語りの統一。判断の揃い。目的の共有。役割の明確化。価値の翻訳。」

宮本は静かに頷いた。

「…全部、今日の会議で起きていました。」

「そうだ。共創力は、技術者が未来を動かすための“最後の鍵”なんだ。」

佐伯の声は、淡々としていた。だが、その淡々とした語りの奥には、確かな信念があった。

5. 技術者は、未来をつなぐ“橋”である

その日の夕暮れ、宮本は研究所の屋上に立っていた。街の灯りが、遠くまで続いている。その灯りは、まるで価値の流れのように見えた。

佐伯が隣に立った。

「宮本、技術者はね……未来をつなぐ“橋”なんだよ。」

「橋…ですか。」

「そうだ。技術と事業、組織と組織、人と人。その間に橋を架けるのが、技術者の役割だ。」

宮本は、静かに頷いた。

「…共創って、橋を架けることなんですね。」

「そうだ。橋が架かれれば、未来は動き出す。」

佐伯の声は、冬の風に溶けていった。

共創の場をつくる者は、すべてを統合する者へと変わっていく。

第5章 次世代開発者に求められる統合力

技術の世界には、しばしば“分断”が生まれる。技術と事業、現場と経営、若手とベテラン、組織と組織。それぞれが異なる言葉を使い、異なる価値観を持ち、異なる時間軸で動く。その分断は、時に深い谷となり、技術の未来を阻む。しかし、歴史を振り返れば、大きな変革を成し遂げた人物は、いつの時代も“統合”の力を持っていた。技術と人、組織と組織、過去と未来。それらをつなぎ合わせ、ひとつの流れとして動かす力。

この章では、技術者が未来を動かすために必要な「統合力」という最後の力を描く。

1. 冬の夜、研究所の屋上にて

冬の夜は、研究所の屋上に静寂をもたらす。街の灯りが遠くまで広がり、その灯りは、まるで人々の営みをつなぐ糸のように見えた。宮本は、その灯りを見つめていた。第1章から第4章までの経験が、彼の胸の中で静かに積み重なっていた。

技術の急所を捉える力。

構造を読み解く力。

語りで組織を動かす力。

共創力としてのリーダーシップ。

それらは、別々の力ではなかった。ひとつの流れの中で、互いに影響し合い、未来へと向かう力だった。

そのとき、背後から足音が聞こえた。

「宮本、ここにいたのか。」佐伯だった。

「佐伯さん… 技術って、こんなに広い世界とつながっていたんですね。」

「そうだよ。」

佐伯は、街の灯りを見つめながら言った。

「技術は、技術だけでは未来を動かせない。だが、技術は未来を動かす“核”になる。」

宮本は静かに頷いた。

2. 技術だけでは未来は動かない

佐伯は、ゆっくりと語り始めた。

「宮本、技術というものは、それ自体は静かだ。だが、技術が価値になるとき、そこには必ず“人”がいる。」

宮本は、その言葉を噛みしめた。

「技術の急所を捉える者は、未来の一点を見る。構造を読む者は、価値の流れを見る。語りを整える者は、組織の心を動かす。共創する者は、人と人をつなぐ。」

佐伯は、夜空を見上げた。

「だが、未来を動かすのは、これらを“統合”できる者だ。」

宮本は、静かに息を吸った。

3. 統合力とは、未来を“つなぐ力”である

「宮本、統合力というのはね……未来をつなぐ力なんだよ。」

「未来を…つなぐ。」

「そうだ。技術と事業、組織と組織、人と人、そして、過去と未来。」

佐伯は、街の灯りを指さした。

「見えるかい？あの灯りは、ひとつひとつは小さい。だが、つながることで街を照らす。」

宮本は、その灯りを見つめた。

「…技術者も、そういう存在なんですね。」

「そうだ。技術者は、未来をつなぐ“橋”なんだ。」

4. 統合力を持つ技術者は、未来を動かす

佐伯は、静かに語り続けた。

「宮本、統合力を持つ技術者はね……組織の判断を揃え、価値の流れをつくり、未来の市場を開き、事業を動かす。」

宮本は、深く頷いた。

「…技術者が未来を動かす時代なんですね。」

「そうだよ。技術者は、未来をつくる存在なんだ。」

佐伯の声は、冬の風に溶けていった。

5. 静かな決意

宮本は、街の灯りを見つめながら言った。

「佐伯さん…僕は、未来をつなぐ技術者になりたいです。」

佐伯は、静かに微笑んだ。

「その気持ちがあれば、もう半分はできている。」

宮本は、夜空を見上げた。その空は、どこまでも静かで、どこまでも広がった。

未来は、まだ形を持たない。だが、その輪郭は確かに見え始めていた。

結論 創造力と共創力を兼ね備えたリーダーの誕生へ

技術というものは、人間の歴史の中で、常に静かに進んできた。火を扱う技術、鉄を鍛える技術、船を造る技術、そして、現代の電子や材料の技術。

どの時代にも、技術は人間の営みを支え、未来を形づくってきた。しかし、技術そのものが未来を動かしたわけではない。未来を動かしたのは、技術を扱う“人間”であった。その人間が、どのように技術を見つめ、どのように語り、どのように他者と交わり、どのように未来を描いたか。それが、未来を決めた。

1. 技術者は、未来の“語り部”である

佐伯は、研究所の廊下を歩きながら思った。

「技術者は、未来の語り部である。」

技術の急所を捉え、構造を読み解き、語りを整え、共創の場をつくり、それらを統合して未来へとつなぐ。その姿は、かつて歴史の転換点で活躍した人物たちとどこか似ていた。彼らは、時代の流れを読み、人々の心を動かし、未来への道を切り開いた。技術者もまた、未来を切り開く存在である。

2. 技術の未来は、静かに始まる

未来というものは、大きな音を立てて始まるわけではない。それは、冬の朝の霜のように、静かに、しかし確実に姿を現す。

技術者が、

ひとつの急所を見抜いたとき。

ひとつの構造を読み解いたとき。

ひとつの語りを整えたとき。

ひとつの共創が生まれたとき。

未来は、静かに動き始める。

その動きは、最初は小さく、誰にも気づかれないかもしれない。だが、その小さな動きが積み重なり、やがて大きな流れとなる。歴史とは、そういうものだ。

3. 技術者が未来を動かす時代へ

宮本は、研究所の屋上から街を見下ろしていた。街の灯りは、まるで無数の未来がそこにあるかのように輝いていた。

「佐伯さん……技術者って、未来を動かす存在なんですね。」

佐伯は、静かに頷いた。

「そうだよ。技術者は、未来をつくる存在だ。」

宮本は、その言葉を胸に刻んだ。技術の急所を捉え、構造を読み解き、語りを整え、共創の場をつくり、それらを統合して未来へとつなぐ。

そのすべてが、技術者の手の中にある。未来は、技術者の肩にかかっている。

4. 静かな決意

冬の夜空は、どこまでも静かだった。その静けさの中で、宮本はひとつの決意を胸に抱いた。

「未来をつなぐ技術者になろう。」

その決意は、声に出すほどのものではなかった。だが、静かに、しかし確かに彼の胸の奥で灯り続けた。佐伯は、その横顔を見つめながら思った。

「未来は、こうして受け継がれていくのだ。」

技術者の営みは、歴史の営みと同じである。静かに始まり、静かに積み重なり、静かに未来へとつながっていく。

5. 終わりに

技術者が未来を動かす時代が来ている。技術の急所を捉え、構造を読み解き、語りを整え、共創の場をつくり、それらを統合する力。この五つの力を兼ね備えた技術者こそ、次の時代のリーダーである。

未来は、静かに始まる。だが、動かすのは人間だ。そしてその人間は、技術者である。

あとがき

技術者という存在は、しばしば孤独である。実験室の静けさに身を置き、データと向き合い、自らの思索の中に沈み込む。その孤独は尊い。だが、未来をつくるには、それだけでは足りない。技術は、技術だけでは未来を動かさない。未来を動かすのは、技術を扱う“人間”である。

本書で描いた五つの力は、技術者が未来をつくるための道標である。急所を捉え、構造を読み、語りを整え、共創し、統合する。その営みは、歴史の営みと同じである。静かに始まり、静かに積み重なり、静かに未来へとつながっていく。

読者の皆さまが、それぞれの現場で未来をつくる一歩を踏み出されることを願っている。